BY THE SEA
for the sea side life

文◎ジョージ・カックル
text by George Cockle

Artist : Linda Ronstadt
Title : Canciones de Mi Padre
Release: 1987
Label : Asylum
Item Number : 40128

のりのりマリアッチなリンダ・ロンシュタット

リンダ・ロンシュタットは知ってるだろうか。彼女は70年代から「悪いあなた」や「私はついてない」など、数々のヒット曲を飛ばした西海岸を代表するスーパースターだ。あのイーグルスさえ元々リンダのバックバンドだった。紛れもなくロッカーというイメージだが、彼女はさまざまなジャンルに挑戦した。例えば、アーロンネビルとのデュエット曲「Don't Know Much」やネルソン・リドルとのコラボレーション。あまり知られていないのはマリアッチのアルバムを出したこと。実は彼女の父親はメキシコ人とドイツ人のハーフだった。子供の頃はメキシコ人が多いアリゾナ州のツーサンに住んでいたので、代表的なメキシコ音楽、マリアッチを聴きながら育ったという。その影響だろう、1987年にはマリアッチのアルバムを作りツアーにも出て行った。マリアッチはトランペットやギター、ベースを歩きながら弾いて歌って、陽気に演奏するメキシコ特有の音楽だ。僕はそんな音楽をひっさげてライブをするリンダを見たことがある。

あれはロサンゼルスで開催されたライブに行ったときのでのことだ。会場はロスのハリウッドブルバードにあるパンタジェスシアター。この建物は1930年代に造られた、素晴らしいアールデコの劇場。入るとその時代のモチーフの照明、赤く、ちょっと黴臭い絨毯、まるでその時代に戻ったかのような錯覚に陥るほど昔のままだ。そんな場所でのライブは、実におもしろいものだった。アメリカ人は確かにノリがいい。コブシを上げ、声援を送り、指笛を鳴らしたりなんかして騒ぐ。日本のコンサートよりもずっとノリノリだが、メキシコ人はそんなの比ではなかったんだ。ロサンゼルスという土地柄、メキシコ人が多くて、ライブ会場はまさにメキシコそのものだった。そして騒ぎまくり、音をだしまくり、歌いまくる。みんなテキーラを飲んでいるんじゃないかと思うほど、テンションが高い。マルガリータじゃなく、テキーラだ。リンダの歌声なんて全然聴こえない。演奏なんてそっちのけで、客はのりまくって楽しんでる。そんな様子にアメリカ人は帰る有様だ。僕だって驚いたよ。これはなんの事態だってね。でも、リンダは血が騒ぐのか、そんな状態を楽しんで歌ってる。メキシコ人にとってはそれが普通なんだね。僕はといえば、帰らずに、その状況を楽しんでみようと決めた。マリアッチの国は熱い。お国柄ってあるね。国によってコンサートも全然違う。今、リンダ・ロンシュタットは、66歳。すっかりメキシコ人になって、お尻も大きくなっている（おっと失礼）。でもそれもメキシコ人にとって魅力的なんだろう。今度は本場メキシコで、彼女のライブを観てみたい。きっと、ロサンゼルスで経験した以上にすごいんだろうな。とはいっても、今はマリアッチではなく、ケイジャン・ミュージックをやっている。ケイジャンというのは、ニューオリンズの回りの沼地の住んでいる人々の間から生まれたエスニックミュージックだ。彼女がそれをどんなふうに歌っているか楽しみだ。★

PROFILE　ジョージ・カックル◎1956年鎌倉生まれ。日本人で日本舞踊の師匠の母とアメリカ人でヨットマンの父を持ち幼少時代を日本・テキサス・韓国で過ごす。小学3年生でビートルズに開眼。LAで有名なサーフポイントでの初サーフィン体験。この原体験が彼のその後の人生を決定付ける。日本での学生生活の後、憧れのインドをはじめ世界を放浪し、ハワイ経由でサンフランシスコに移り住み18年間波乗りに明け暮れた。1995年帰国後、生まれ故郷鎌倉へ音楽マネージメント＆制作会社を立ち上げ、日本のミュージックシーンにbabamaniaなどを輩出。音楽プロデューサー、コラムニスト、作詞家(マッドカプセルマーケッツ、阿川泰子など)として、2006年の8月には子供の英語・音楽教育用の本『ウクレレ・マミー・アンド・ミー』を出版。古今東西の音楽と文化と人間臭さをこよなく愛し日本と世界を結ぶ架け橋になりたいと願い、今日もボブ・マーリーを聞きながらサーファーとしても多忙な日々を送っている。現在、インターFM(76.1)毎週日曜日、9:00～13:00 レイジーサンデーを担当。

©George Cockle / Home & Decor By THE SEA